日本の時代史　20

井上勲編『開国と幕末の動乱』

鈴木由子

「明治維新とは一八五〇年代から七〇年代に至る間に生じた社会変動であり、それは日本が国際社会（主権国家により構成）に編入される過程で生じたものである。ペリー来航により、この社会変動は日本の意思とは無関係に進行していき、その結果、日本はたとえ不平等であるとはいえ、国際社会の秩序に編入された。

一方国内では幕府支配の正当性をゆるがす問題が山積していた。その混乱期に幕政を立て直すべく大老職に就いたのが井伊直弼であったが、彼の暗殺後、幕府はその強権を引き継ぐことができず、幕府の権威は一気に下り坂になった。反対に朝廷の政治的意味が強くなり、「王」を手に入れるのは誰かが争点となる。

結局幕府は崩壊し、あわせて朝廷の秩序も解体される。そして日本は新しい朝廷を頂点とする近代国家に変貌した。

Ⅰ「動乱の中の信仰」（宮崎ふみ子）

政治・経済・社会制度の機能不全、治安の悪化、天災、疫病などの混乱により、民衆の間に世直し願望が広まった。そういった民衆の要求を基盤としていくつかの宗教団体が生まれた。

しかしそれらの団体やその指導者が政治に接近するにあたり、果たして民衆の意向を吸い上げることができたのであろうか。また、彼らが朝廷や天皇をどう位置付けたのか。これらが問題である。

Ⅱ「動乱の時代の文化表現」（延広真治）

文久年間の文化現象として、三遊亭円朝（一八三九～一九〇〇）の「怪談牡丹灯籠」と「鰍沢」を取り上げる。

「怪談牡丹灯籠」はお札はがし譚の代表である。お札はがし譚と非お札はがし譚からいくつかの例をとりあげ、その成立ちを検討している。「鰍沢」は三題咄の傑作であり後の落語、歌舞伎、講談に大きな影響を与えた作品である。

円朝の話芸は速記という手段により今日まで伝わり、現代の芸能に大きな影響を与え続けていることの意義は大きい。

Ⅲ「『武威』の国　異文化認識と自国認識」（池内敏）

前近代において、外国に対する「武威」が日本においてどのように捉えられていたのか、またそれが近代以降の対外侵略にどのように利用されたのであろうか。

前近代の東アジアの外交体制は、近現代のような建前上は平等な主権国家間のそれとは異なる。そのような環境で、国家主権者の呼称、日朝関係、漂流民問題を通じ、日本の為政者や一般の武士・民衆はどのような異国認識を持っていたのかを検証する必要がある。

Ⅳ「徳川の遺臣　その行動と倫理」（井上勲）

「遺臣」とは、前王朝の臣で新王朝に生きる者であるという定義に従うとすれば、王朝ではない幕府が瓦解しても「徳川の遺臣」は存在しないということになる。しかし幕府に備わる王朝的性格を挙げてそこに「遺臣」の存在を認め、ジャーナリスト、キリスト者、新政府関係者などさまざまな道に進んだ彼らの生き方をなぞる。

Ⅴ「明治維新とアジアの変革」（山室信一）

明治維新という変革運動がアジア諸国でどのような位置を占めるのかを、海外からの視点で見直す。

一九世紀、西洋化は日本だけではなく、他のアジア諸国も飲み込んだが、日本の明治維新はそれらの国々にとっての先例となった。そのなかでも清朝の変革運動と辛亥革命をとりあげ、それらの運動において明治維新がどのように捉えられ、思想や学問などさまざまな面においてどのような影響を与えたのかを明らかにする。

まとめと感想

最後にこの巻を読んで感じたことを何点か述べる。「史実を客観的に評価することは難しい」。特に現在生きている我々に近ければ近いほど。これが現在の心境である。

① 価値観を伴った用語

一般的に「幕末」を連想させる語句には、他の時代と比較して後世の価値観が反映されているものが多いように思われる。このことはこの時代を客観的に評価することを妨げている。

たとえば「官軍」「賊軍」である。朝廷に弓を引こうとした者、つまり「賊軍」がはたして存在したのであろうか。将軍継嗣問題における南紀派と同じである。

また、「尊皇攘夷」・「勤皇」と「左幕」は対立概念として使われる場合がある。幕府側の考えも基本的には「尊皇攘夷」であり、左幕派も討幕派同様「勤皇」であった。左幕対勤皇という対立構造は存在しなかったのである。

② 戊辰戦争

大政奉還が慶応三年、王政復古後一二月八日には将軍職が廃止されている。翌年二月、慶喜は寛永寺に入り、閏四月には家達が駿河府中七〇万石に封じられている。「恭順」している者をなぜ「追討」しなければならないのであろうか。

戦争を正当化するためにはそれなりの「敵」が必要であるということや、戦争は終わらせ方がむずかしいということは今も変わらない。

③ シンボル的であったものが政治性を持つこと

幕末期には今まで実体がなく格式や名誉として存在していたものが政治動向と結びついて現実味を帯びてくることがあった。「武威」と「官位」がそれである。平和な時代にはただ漠然と認識していればよかった「武威」が、戦争の危機に現実として向き合わなければならなくなった時、「武力」として具体的に行使しなければならなくなった。また、家格であった官位が、幕府の弱体化と朝廷の政治化により天皇との君臣関係という意味を帯びてきた。

時代の変革に伴う価値観の変化はこのような形でも現れてくる。それを巧みに利用する者とそれがために苦悩する者。動乱期の人間模様とはこんなものである。

④ アジアからの目

アジア諸国との関係を考えると、日本の立場は微妙であると言わざるを得ない。改革を進め、近代以降の欧米中心の世界でそれらの国々と何とか対等な関係を結ぶことに成功した日本に対する彼らの視点。反対に後の日本の大陸進出に対する批判的なまなざし。どちらも事実であり、それから逃れることはできない。

敗戦からしばらく、アジアについて語ることをはばかられた時代はもう終わった。客観的な判断に基づいた視点を持つこと。敗者側にとっても、被害者側にとってもたいへんなことかもしれないが、最重要課題である。